
 學 會

第 31 回大日本耳鼻咽喉科學會中國地方會記事

期 日 昭和 10 年 12 月 22 日午後 2 時

場 所 岡山醫科大學第 1 講堂

1. 藥劑中毒に因る聽器障礙に關する
 實驗的研究(第 1 報). 藥劑のプ
 ライエル氏反射運動に及ぼす影響に
 就て

尾 錢 二 郎

演者は「サリチール」酸「ナトリウム」鹽酸「キニ
 ーネ」「アトキシール」「ヘノボチ」油を多數の海
 猿に應用し、之等藥劑のプ
 ライエル氏反射運動に
 及ぼす影響を比較研究せり。而して、本實驗に先
 だち、先づ本反射が種々なる要因、例之刺戟音の
 性的或は量的變化により著しき變動を現はす他
 に、動物の全身症狀の如何により又著明なる變動
 を呈することを確認し、以て藥物の作用に起因す
 る本反射運動の變化消長の觀察に誤なきを期せ
 り。尙ほ本反射運動の觀察には描畫装置を採用
 し、主として其の運動振幅を目標とせり。扱前述
 の 4 種藥劑の本反射運動に及ぼす影響を略述する
 に、「サリチール」酸「ナトリウム」鹽酸「キニ
 ーネ」は、本反射に變動を起さしむること稀にして、且
 其の程度も一般に軽く、而も本反射運動の一時的
 減弱を呈せるものと雖も、其の大多數は數日後、
 實驗前の状態に回復せり。反之、「アトキシール」
 は、多數例に於て本反射を全く消失せしめ、而も
 其の回復を見たるもの無し。「ヘノボチ」油も亦本
 反射運動に著明なる影響を及ぼし、殆ど總ての例
 に於て、本反射の減弱或は消失を來せり。然れ共

又一面、本反射の回復を見たる例も尠からず。但
 し其の回復程度の、實驗前の状態に達するは稀な
 り。

要之、海猿に於けるプ
 ライエル氏反射運動は、
 應用藥物の種類により、其の變化發現様式並に其
 の消長に於て、著明なる差異を示すものなること
 を確認せり。(自抄)

2. 下顎切除を行ひたる下顎癌腫の
 1 例

山 末 一 雄

患者は 63 歳の男子、約半年前より下顎右側第
 1—第 2 大臼齒に相當する齒齦粘膜に豌豆大の出
 血性潰瘍を生じ、某醫より軟骨肉腫なる診斷を附
 せられ岡山醫科大學耳鼻咽喉科に紹介入院。組織
 學的検査其の他より角化性表皮癌なる事が明かとな
 り、側咽頭切開に依り先づ右側顎下淋巴腺を摘
 出し同時に罹患せる下顎骨を健康と思はれる部ま
 で充分切除せり。而してこの際下顎骨の連續は一
 部これを残せるため手術後下顎の機能障礙をのこ
 す事無く、臨牀的治癒の状態にある 1 例に就て報
 告せり。(自抄)

8. 一壞疽性安魏那患者の臨牀的並
 剖檢的觀察

廣 瀬 眞 治

咽頭殊に扁桃腺の壞疽を來す疾患は多種なるも

演者は最近嚙下痛及び兩側顎下部の腫脹を主訴とする17歳の女學生に於て、軟口蓋全體發赤腫脹し兩口蓋扁桃腺は殆ど壞疽に陥ち入り、惡口臭を伴ふの外、肝臓に軽度の腫脹ありしも。兩顎下淋巴腺以外の淋巴腺腫脹なく皮膚に發疹を認めず、壞疽塊よりは「ヂフテリー」様菌及び連鎖狀球菌を發見し、尙ほ血液所見として中等度の白血球増加あり、其の血液像の特徴とし20%内外の大單核細胞増加を來せる1例を経験せり。診斷に當り演者は「ヂフテリー」性安魏那か、大單核細胞増殖性安魏那か何れ共決定し兼ねしも、恐らく連鎖狀球菌と混合感染せる惡性「ヂフテリー」ならんと考へ治療を加へたるに其の效なく不幸發病以來10日にて死亡せり。之を剖檢し筋肉及び腸内への出血、心筋の脂肪變性、肝臟腎臓の實質變性及び扁桃腺周圍組織に纖維素性炎を認めしも、扁桃腺實質内に「ヂフテリー」菌を發見せず、且頸部淋巴腺及び頸靜脈壁に著變なく、この剖檢的所見は「トキシケミー」を思はしむる状態にして、こは又重症「ヂフテリー」の際屢々認め得る變化なるが、これを前述の臨牀的觀察及び重症「ヂフテリー」の際に大單核細胞は相當の増加を來し得ることと對比して、本例は恐らく「ヂフテリー」の壞疽型のものならんと述べたり。(自抄)

4. 扁桃腺周圍炎に續發せる副咽頭間隙に於ける壞疽性蜂窩織炎の1例

田村 誠彦

演者は49歳の男子にして、扁桃腺周圍炎に續發して第5病日に副咽頭間隙の壞疽性蜂窩織炎を惹起し、第11病日に他醫師の紹介により當科に轉科し來れる、既に症狀著しく重篤なる患者に遭遇し、來院當日直ちに外部より手術的操作を加へ廣く副咽頭間隙を開放せしに、一時諸症狀輕快し或は治癒するやとの望を懷かしめしも、其の後再び

廣敗性炎症の進行し、次第に衰弱し、第20病日に到り創面の壞疽性糜爛を呈せる血管より侵蝕性出血を起し、心臟衰弱は増強し、肺水腫を起し、遂に第22病日に到り心臟麻痺の爲死亡せる1例を報告し、本例に於て、若し病竈の開放が今少しく早期なりしならば或は之を救ひ得たるならん事を述べ、更に療法として、輸血、創面の「リパノール」持續洗滌及び太陽燈照射等の效果ありし事を注意し、且起炎菌として目下尙ほ精細に研究しつつある一嫌氣性菌に言及せり。(自抄)

5. 顎間骨形成異常に併發せる鼻腔内齒牙逆生の症例

川本 重雄

上顎齒牙の鼻腔内逆生に就ては從來既に70餘の報告例ありて、敢て稀有なるものに非ざるも、演者の経験せる1例は類例の乏しきものなれば茲に報告せり。

症例、19歳の女子にして左側口唇顎骨破裂あり、同側の鼻前庭に齒冠を上方に向けて齒牙挿立す。レントゲン検査によりて上顎前左側部に骨缺損ありて、其の内縁に該齒牙の齒根の附着せるを認む。而して左側上顎第2門齒を缺如せるを見たり。

本例は顎間骨形成異常によつて第2門齒が其の方面を轉倒せしものと推斷され、斯くの如き例は外國に於てグリッフィン、ライザー、ケルレンダーの報告あるのみなり。(自抄)

6. 鼻咽腔惡性腫瘍の2例に於ける臨牀的觀察

淺黄 由喜雄

演者は最近相踵いで鼻咽腔惡性腫瘍の2症例を経験し、而も兩例とも初めは原病たる腫瘍は全く見遁され却つて他疾患として永く治療されるたる

ものなるが、後に至り原病の鼻咽腔腫瘍なること判明し、之が治療によりて始めて諸症状の輕快を得たるものにして、其の臨牀的經過に甚だ興味深きものありたれば之に就て報告せり。即ち第1例は41歳の女子、高度の兩側難聴を主訴とし、爲めに長期間に亙り單に中耳「カタル」として治療を受けたるも毫も輕快せずして岡山醫大耳鼻喉科を訪れ、始めて茲に鼻咽腔腫瘍を發見され、組織的検査の結果淋巴肉腫なることを確められしものなり。第2例は31歳の女子、急激に進行する羸瘦を主訴とし、某大學病院内科に約1箇月間胃下垂症として入院治療を受けたるも輕快せずして、其の後家庭にて養生を續けたるに漸次強度の鼻閉塞を來たし、爲めに地方の専門醫に受診し、茲に鼻咽腔腫瘍を發見され紹介されて當科に來たり、組織的検査により扁平上皮癌なることを確定されたるものなり。而して之等2例に對し演者は主として放射線療法を應用し、即ち第1例に於ては腫瘍の大部分を切除せし後之にクーター氏遷延レントゲン照射法、第2例は「ラヂウム」針刺入療法を施し、第1例に於ては難聴の輕快、第2例に於ては治療後日ならずして體重の増加を來し、共に目下臨牀的治癒の状態にあるを述べ、斯かる鼻咽腔惡性腫瘍は専門醫と雖も往々にして之を看過し、其の診斷を誤まることあれば診察に當り殊に細心の注意を拂ふべきなりと述べたり。(自抄)

7. 3箇月間肺門淋巴腺結核として治療されたる小兒氣管支異物の1例

原 良 太 郎

氣管支異物は往々見道され、肺炎肺結核等と誤診される事あり、特に小兒に於て屢々之を經驗するは、既に先人の再三注意されし所なり。演者の最近經驗せるは、6歳の男子にして、遊戯中誤まりて玩具の「オペラバッグ」の止金を嚥下し、其の

直後激しき咳嗽發作、發熱を見たるものなるが、斯く氣管支異物としての病歴々然たるに拘らず、當初之を診察せし小兒科醫により氣管支異物は考慮されずして、當時患者の兄2人が罹患し居たりし耳下腺炎に傳染せるものならんと云はれ、更に輕快を得ざるにより肺門淋巴腺結核として治療を續けられたるも、發病以來3箇月後に至るも咳嗽、發熱止まずして、遂にレントゲン撮影により茲に始めて氣管支異物の存在發見され、紹介されて岡山醫大耳鼻喉科に來り、異物摘出により速かに治癒を來せしものなり。一般に氣管支異物に於ては自覺的並に他覺的に症状極めて輕微なることありて、病歴に細心の注意を傾けざれば、稍々ともすれば看過されて他疾患に誤診される事あり。殊に本例の如きは病歴に於て充分氣管支異物を疑ひ得るに拘らず、異物としての他覺的症状少き故を以てか、尙ほ且其の診斷を誤まれたるものにして、されば特に小兒に於て、病因不明の發熱、咳嗽のある際は、常に一應病歴を問つて異物誤嚥の有無に就て充分検討すべきなりと述べたり。(自抄)

8. 全摘出を行ひ得たる扁桃腺肉腫の1例

登 坂 清

口蓋扁桃腺肉腫に於て、其潤は既に扁桃腺被膜を越えて周附組織に波及し一見手術不可能とみゆる如き症例に於ても、尙ほ且比較的容易に腫瘍の全摘出を行ひ得るもの有る事實は臨牀上注意すべき所にして、曩に第30回當地方會に於て小坂、大野兩氏は2例(26歳の男、及び79歳の男、何れも1側口蓋扁桃腺圓形細胞肉腫)を擧げて吾人の注意を喚起する所有り、口蓋扁桃腺肉腫にして従來手術不可能なりとされたるもの内にも簡單なる手術的操作によつて腫瘍を完全に剔出し得るもの決して尠からざるべきを述べられたるが、余

も亦最近かかる1例を経験せるを以て之を追加報告せり。患者は46歳の女にして6箇月前より咽頭異物感と共に右側口蓋扁桃腺が漸次腫脹を來し來院す。診るに右側口蓋扁桃腺は略ぼ小兒拳大に腫脹し正中線を越えて他側に及ぶ。表面は凹凸不平、色は紫藍色を呈し、潰瘍、偽膜等無く、前口蓋弓の遊離縁亦紫藍色を呈し軽度に腫脹し、觸診するに浸潤を認む。組織學的には圓形細胞肉腫なり。本例に對し小坂、大野兩氏の例に倣ひて、田中式開口器、同扁桃腺摘出用剪刀を使用し口蓋扁桃腺摘出の術式に従ひ軟口蓋の一部と共に扁桃腺の摘出を試みたるに、浸潤部位は健康部位と比較的鋭利に境せられ甚だ容易に腫瘍を完全に剔出し得たり。患者は術後8箇月の今日尙ほ再發の徴を見ず。(自抄)

9. 永き経過をとれる1副鼻腔腺樣癌腫に於ける臨牀的觀察

守屋 誠

演者は大正10年發病し今日に至る14年間の永き経過を有する鼻腔内癌腫患者(69歳男)の経過を述べ、發病當初鼻腔内癌腫切除術を受けたる後、昭和8年まで自覺的に良好に経過せるは、切除術により一時臨牀的治癒を見、其の後再發せるものならむ事を強調し、組織的に比較的悪性度弱き腺樣癌腫なる事、及び退行性變性を物語る砂粒腫組織を混じ居たりし事は、共に此鼻腔内癌腫の發育緩慢なりしに有力なる説明を與へるものなりとし、昭和8年行へる手術的切除術に加ふるに「ラヂウム」針腫瘍内刺入法及びターター氏遷延分割レントゲン線照射療法も其の経過に良好なる結果を齎せるものなる事を述べたり。而して目下患者はレントゲン線にて治療中なるも今後の経過は亦非常に興味ある問題なりとし、且組織標本、レントゲン寫眞像を供覽せり。(自抄)

10. 腦腫瘍に因る聽器障礙に關する實驗的研究(標本供覽)

高原 滋 夫

腦腫瘍に因る聽器障礙に關する實驗的研究に當り從來試みられたる肉腫「エムルジラン」の注射は種々なる意味に於て此實驗目的には不適當なり。因て余は之に代ふるに粟粒大の肉腫片の挿入を選び、家兎に於ける1側小腦橋隅角部腫瘍を作り、實驗後35日前後にして主として前庭症狀を呈し瀕死に陥れる試獸に就て兩側聽器を腦に附着せしめし儘兩切り切片とし、絶えず病變を健側と比較對照しつつ仔細に檢索せり。而して移植されたる腫瘍は主として内聽道を経て内耳に進入を企てるが、其の所見は大別して(甲)、腫瘍が内聽道を充填せるも未だ兩節細胞部迄侵入せざるもの、(乙)既に腫瘍が直接兩節細胞部迄侵入せるもの2型に分ち得。茲に於て前者(甲)は恰も聽神經切斷實驗と等しき意味を有し、余の成績に依り之を觀るに螺旋のみならず前庭節細胞に於ても著明なる萎縮變性を認め得るが、内耳動脈の腫瘍により損傷せられ居らざる際は其の終末裝置は蝸牛前庭何れに於ても毫も變化を認め得ざりき。然れ共此際内耳動脈の損傷せられしものに於ては兩節細胞の萎縮の他、其の終末裝置に著明なる荒廢現はれ、コルチ器は破壊し脈絡帶は剝離し、前庭に於ても略ぼ同様の變化を認めたり。次に(乙)型に於ける如く既に腫瘍の直接兩節細胞部位迄侵入せる場合は兩節細胞に著明なる萎縮あるは勿論なるも此場合と雖も内耳動脈の損傷せられざる限り其の終末裝置に毫も變化を認めざりき。斯く余の實驗の一部成績は腦腫瘍により聽神經遮斷實驗を行ひ得たるものと云ひ得べく、其の所見は聽神經切斷實驗者中細見氏の夫に一致し、更に内耳動脈の損傷せられざる限り終末裝置は聽神經の荒廢に無關係に存在し得るとなす彼の所説に有力なる根據を與ふ

るものなりと述べ、標本供覽を以て之を説明せり。
(自抄)

追 加

細 見 英

只今演者は腦腫瘍の移植により1側聽神經の遮斷を來さしめ、其の立派な標本を以て、私の嘗て行ひました聽神經切斷實驗の成績を批判され、幸に私の所説の正しかりし事に有力なる根拠を與へられ、私自身大變嬉しく思ふと共に茲に演者の實驗に敬意を表すと述べたり。(自抄)

11. 腺窩性扁桃腺炎の像を主徴とし
家族内に急速に傳播したる猩紅熱に就て

細 見 英

演者は最近経験せる異型的經過を示せし猩紅熱の症例に就て報告せり。即ち最初43歳の婦人が發熱、咽頭痛を訴へ往診を求め、診るに兩側口蓋扁桃腺は發赤腫脹し實扶的里様の義膜を被るも、其の義膜を鏡檢し連鎖狀球菌のみより成れるを知り該患者を腺窩性扁桃腺炎として處置し居たり。然るに翌日患者の次男(13歳)、其の翌日長女(17歳)、3日置きて看護婦(30歳)、更に2日置きて他の看病婦(50歳)、其の翌日長男(16歳)の都合6人に全く同様の扁桃腺炎を繼發し、何れも腺窩性扁桃腺炎として治療し居たるが、計らずも次男、長女の兩人は初診後數日餘にして全身に猩紅熱性發疹を現はし、茲に始めて之等相踵いで罹病せる扁桃腺炎は單なる腺窩性扁桃腺炎に非ずして不全型猩紅熱の際の扁桃腺炎なりしものならんと考ふるに至り、其の後傳染の豫防に努力し續發者を出す事なく幸に何れも治癒せしめ得たり。斯く猩紅熱にして不全型のものに於ては本例の如く單に咽頭炎のみを主徴として來り、僅かに皮膚に發疹を認むるか又はこれを全く缺如して經過し、或る時

日の後落屑を來し、茲に始めて之が猩紅熱たりし事に氣付く場合も往々經驗せられ、我々が日常種々取扱ふ扁桃腺炎の際に常に慎重なる態度を以て此點に留意するを要すと一般の注意を促がせり。(高原抄)

追 加

山 口 治

北海道の病院に勤務せる頃、其の地方の寒國なる爲か中國地方にては想像だに及ばざる程多數の猩紅熱患者に遭遇せり。而して今細見博士の述べられし如き、扁桃腺炎を主徴として無發疹に經過し、家族内に相踵ぎ傳染し始めて猩紅熱たりしに氣付ける症例を多數經驗し、「扁桃腺炎を見れば猩紅熱を疑へ」と迄に考へ治療に従事せし事あり。其の際扁桃腺表面又は腺窩内より得たる粘液又は粘膜を鏡檢し連鎖狀球菌の場合最も多く、時に又實扶的里菌の存する事もあり、尙ほ又扁桃腺の壞疽性の際には屢々「スピロヘーター」を發見したり。

丹毒も北國に於ては安魏那を以て發病するもの多く、且尿に「ウロビリノーゲン」反應陽性を呈す點等猩紅熱に相似たる所多く、之等の點より推して猩紅熱も連鎖狀球菌を以て起炎するものとなすの妥當なるを推ふ者なりと述べたり。(高原抄)

追 加

笠 井 經 夫

一家系内に傳播せる猩紅熱性安魏那の経験を追加せり。咽頭に定型的の腺窩性安魏那の像を呈し發熱38度を有したる10歳の女兒は2日の後解熱全治せり。次いで母親は其の頃より、父親は5日の後に同様の扁桃腺炎を發したるも母親は3日後全治せり。然るに父親は發病翌日より全身に定型的の猩紅熱性發疹を來せり。女兒に於ては、發疹皮膚剝脫を缺きたるも、母親に於ては僅に頬部、

指頭に皮膚剝脱のみを、父親に至りては定型的の發疹、皮膚剝脱を以て経過せり。この女兒より發したる一見單純なる腺窩性扁桃腺炎は母親を経て父親に傳播するに及び定型的となりたる猩紅熱なりし事を指摘し一般の注意を喚起する所ありたり。(高原抄)

追 加

田 中 文 男

先年當地の高等學校に腺窩性扁桃腺炎の流行を見、其の十數名を診察したる際2名の猩紅熱患者を發見せり。斯くの如く一般に腺窩性扁桃腺炎として取扱はるるものの中には猩紅熱性のものの混在せる事を指摘し、猩紅熱病原菌は腺窩性扁桃腺炎の起炎菌と同種のものにして、其の中のあるものは或種の動機の下に猩紅熱としての症狀を發現するものに非ざるかとの見解を披瀝せられたり。(高原抄)

12. 側咽頭切開によつて摘出せし舌癌の2例

小 田 大 吉

演者は第27回地方會に於てセーレンセンの皮膚切開に據る側咽頭切開の術式竝に其の利點を紹介し、この術式によつて摘出せし舌邊緣部に於ける癌腫の4例に於ける治療経験を述べ、即ち内1例は其の後他疾患の爲斃れしが他の3例中1例は頸腺の轉移の爲不幸の轉歸をとりしも、2例は良好の経過をとり1例は既に滿3年に達し、1例は未だ術後1年なるも臨牀的には治癒の状態にあるを報告せり。其の後之等の例は1例は今春肺炎のため死亡せしも癌腫再發の微なく(3年8箇月経過)他の1例は2年半を無事経過せり。其の後演者は今年2例の舌邊緣部の癌腫をこの術式によりて原病竈竝に頸部淋巴腺轉移を處置し、之等は未だ半

年を経過せるのみなるも目下臨牀的には治癒の状態にあり。之等の経験よりして、演者はこの術式がかかる部位の癌腫に對しては(1)下顎骨に觸るる事無く而も自由に原病竈を處置し得ること竝に(2)頸部の轉移を處置するに便なる事を述べ、又此際頸部淋巴腺の處置に當つては上部頸腺のみならず下部頸腺處置に注意を要する事を指摘せり。(自抄)

13. 一、小腦橋隅角腫瘍患者の剖檢的觀察

小 田 大 吉

演者は前回地方會に於て一小腦橋隅角腫瘍手術例に就て報告せり(左側小腦障害を思はしむる小腦性失調を主とし之に同側のX IX VIII VII V 腦神經領域に互る障礙を有し、之に對して小腦橋隅角腫瘍の診斷にてクツシングの術式の下に後頭蓋腔を開放せしに蜘蛛膜の下、腦表面に癒着して左側小腦橋隅角部より小腦延髓槽を巡り他側に及ぶ大なる囊胞あり。其の外壁を一部除去、内容排除をせしに翌日より聽力障礙、其の他症狀の著しき輕快をみたり)。然るに此例は其の後肺炎を併發し13日目に死亡せり。剖檢せしに左小腦橋隅角部を中心とし、前方は橋竝に延髓上部前面左半に及び、後方は小腦延髓槽を周りて右方に及ぶ多房性の囊胞にして、始め手術的所見よりして臨牀的所見を大體説明し得たるを以て手術的に開放せしは腫瘍の大部分と思惟せしに實は一部なりしが、生前神經症狀は下方のものより現はれVIII神經の症狀は比較的末期に著明となりしを以て聽神經腫瘍に非ざる可しと推定せしこと、又小腦隅角部の症狀著明なるに錐體道の症狀極めて輕微なるを以て腫瘍は腦質の外にある可しと推定せしことは全く剖見所見に一致せり。腫瘍の性質は肉眼的には淋巴管腫の所見を呈せしも其の壁の一部に

「ノイリノーム」の組織像を呈せる部あり、病理學教室の意見によれば斯る腫瘍は稀なりと云ふ。

(自抄)

14. 肺壞疽を續發したる壞疽性扁桃腺炎の1症例

富 永 廣

患者は20歳の男子、嘗て黴毒に罹り數回「サルバルサン」注射を行ひたる事ある他に特別の既往症なし。今回は數日前より惡寒戰慄を伴ふ高熱と共に劇しき嚙下痛を訴へ、診るに顔面蒼白にして苦悶の狀を呈し、體温41度1分、脉搏105、白血球數14000、肺、心、脾、肝臟正常にして尿に異常なし。局所を診るに口臭著明にして開口運動抑制され、左側口蓋扁桃腺は鳩卵大に腫脹し、暗褐色の厚き偽膜を被れり。偽膜を鏡檢し、實扶的里菌、「スピロヘーター」陰性にして葡萄、連鎖、双球菌のみを見たり。演者は此症例に對し「ネオサルバルサン」實扶的里血清、強心劑、消炎劑の注射を施し、局所は可及無刺戟に處置する方針にて單に吸入のみを行ひ経過を觀察し居たりしに、第11病日より漸次解熱輕快を示し、一時愁眉を開きしも再び第25病日より咳嗽頻發と共に惡寒戰慄を伴ひ肺壞疽を併發、第41病日に至り左側肩胛下に膨隆を來し、之を切開し肺壞疽片を混じたる膿汁を多量に排出し第45病日に瘻孔を遺して退院するに至りたり。斯かる扁桃腺の壞疽狀を呈するものは急性熱性傳染病に因るもの、血液疾患に因るもの、顆粒細胞滅滅性安魏那、大單核細胞性安魏那、ヴァンサン氏安魏那、黴毒性扁桃腺炎等多數擧げ得るも、種々の點を考慮し恐らく本例は極めて良好なる経過を辿りし原發性壞疽性扁桃腺炎なりと思惟するを妥當とすと述べ、之等の類症鑑別に言及せり。(高原抄)

15. 發生部位に興味ある鼻腔基底細胞癌種の1例

西村伊勢松

演者の報告せるは鼻腔内基底細胞癌種の1例にして其の形態が甚だ特異にして、腫瘍も外觀上恰も良性腫瘍の如き觀を呈し、且甚だ簡單なる手術操作によりて臨牀上の治癒に導き得たるものにして、更に鼻腔内惡性腫瘍としては通例追及困難なる腫瘍の發生部位をも略ぼ推測し得たる事は興味ある事實なりとして其の症例に關し詳細なる経過並に手術所見を述べたり。

即ち患者は31歳の女子にして數年來の左側鼻閉塞を主訴として治療を求めたるものなるが、局所々見に於て左側鼻腔内を全く閉塞せる、稍々出血容易なるも恰も良性腫瘍の如き外觀を呈せる腫瘍を認め、精査せるに基底細胞癌腫なる事を知り而も其の病變は未だ上顎竇に波及せざる事を證明し得たるにより主として鼻腔内より手術し總中、下鼻道内に充満せし腫瘍の大部分を除き得たるが、其の結果該腫瘍は篩骨蜂巢表面より發生せる鼻茸様形態を示す甚だ稀なる惡性腫瘍なる事を知り、且二次的に行ひたる同側篩骨蜂巢手術によりて篩骨蜂巢内には全く腫瘍組織の存在せざる事を證明し、其の腫瘍の發生部位は篩骨蜂巢表面の粘膜なりし事を推測し得たるものにして、其の形態及び臨牀上腫瘍所見の恰も良性なるが如くありし點と共に鼻腔内惡性腫瘍にありて其の發生部位を追及し得たる稀なる1例なりと述べたり。尙ほ患者は其の後「ラヂウム」針刺入療法をも併せ行ひたる結果手術後3箇月の今日臨牀上全く治癒せる状態に在る事を附加演述せり。(自抄)

16. 「パンミエロフチーゼ」の1例

北野伊八郎

48歳の男子、教諭。約10年以前腸「チブス」の

既往症を有する外遺傳的關係殊に出血性素質等無き患者が1箇月以前突然不明の發熱39度前後に及び、内科醫の診を受け病因不明なるもとに「アミノピリン」を約1箇月間連用し總量約15gに及び、約10日前より左側硬口蓋に潰瘍を生じ種々の藥液を主治醫より受けつつありたるも輕快する事なきにより余の臨牀を訪ひ來れり。潰瘍部塗抹標本より「スピロヘータ」、紡錘狀菌等を認めたるを以て直ちに「サピオール、ナトリウム」0.3ccを注射したり。且一方血液を検せしに色素耐「ザーリー」38、赤血球168萬、白血球650(大淋巴球56%、小淋巴球36%、大單核移行型3%、中性多核白血球3%、「エオジン」嗜好細胞、「プラスマ」細胞、饒胞細胞共に皆無)、赤血球には大小不同、「ポリクロマチン」等なし。血球型はO型、茲に於て本例は白血球像より見れば「アグラモチローゼ」に一致し、又一方血小板を見れば赤血球1000に對し3にして特發性血小板減少症を想はしめ、又赤血球像を見れば再生不能性貧血に相當す。即ち造血臓器の全系統の侵されたる「パンミエロフチローゼ」に相當するを知り、療法として輸血療法(全量2000g)、肝臟製劑(理研「レバー」)、太陽燈照射、砒素劑の内服等を試みたれども、血液像は良好とならず次第に出血素因加はり入院16日目に死亡す。死後特志解剖を行ひ此診斷の正當なりしを確め得たり。此際用ひたる「アミノピリン」及び「サルバルサン」が本症の因果關係として何等かの連絡を有すべきを推定し、且口腔潰瘍診察に際し使用する藥劑に對する注意を述べたり。(自抄)

17. 丹毒の統計的觀察竝にレントゲン療法に就て

山 口 治

演者は最近數年間に治療せし73例の丹毒患者に

於て、次の諸點に就き統計的觀察を試み報告せり。

1) 年齢、性及び職業的關係。年齢的には10歳以下の罹患者の17例が最高率23%を示し、他の年代は之よりも尠し。更に年少者殊に乳兒にありては豫後悪く死亡數多し。性及び職業別には特別の關係なき如し。

2) 原因的關係。原因的關係としては種々擧げ得るも、殊に頭頸部の手術創より發生せるもの8例(乳嘴突起炎手術後4例、頸部蜂窠織炎切開後3例、後頭部膿瘍切開後1例)ありたるは注意を要す。又安魏那を以て生まれるもの相當多數認められ、安魏那發病後1乃至2日にして兩側耳翼を中心として頭部顔面に發赤を來す事多し。

3) 季節的關係。早春より初夏に至る期間が比較的多き如し。

4) 發生部位。頭部顔面部が最多數にして45例(61%)、且其中、耳翼及び其の周圍に發するもの實に5以上に達す。次いで四肢の23例なり。

5) 種類。紅斑性丹毒75%で最多數、次に水泡性丹毒16%にして、蜂窠織炎性丹毒は9%にして最少數なり。然れども蜂窠織炎性丹毒は最も悪性にして豫後不良なる事多し。

6) 治療法。種々の療法を試みたるが最も有效なりと思はるるは血清の多量注射及びレントゲン療法なり。血清は初回に尠くとも40cc以上を注射す。然る場合24時間以内にて解熱し始むる事屢々にして、若し初回注射にて効果を見ざる時は此療法を放棄するを宜しとす。レントゲン療法は特に推奨すべき療法にして、余は皮膚焦點距離30cm、濾過板は(1)、3mmの「アルミニウム」板(2)、0.2mmの亞鉛板及び2mmの「アルミニウム」板の2種を使用。限界波長0.1 μ 、又は0.09 μ 照射量、 $\frac{1}{4}$ H. E. D.にて相當効果を認めたるも、更に使用方法を考案する時は尙ほ一層の効果を期待し得るものと信ず。(自抄)

18. 病歴不明なる食道異物に就て

田中文男

病歴不明なる氣管又は食道の異物は屢々診断が誤られ易く、殊に哺乳兒の場合に於て其の感の深きは既に諸君御承知の所なり。我教室に於ても先年小田、藏本の兩君は斯かる症例を報告し専門家の注意を促がしたるが、更に佐藤君は縦隔竇炎及び氣胸を續發し死亡せし食道異物(義齒)の1例を報告し、食道異物にして永く停滯せる際は往々周圍組織に迷入し、縦隔竇炎或は肺膿瘍、肺氣腫等を合併し、又稀に肺より異物の脱出する事ありて一般に豫後不良なる事多しと注意せり。余の最近経験せる症例は、7歳の女兒にして4日前より呼吸困難を訴へ喘息として地方醫の治療を受け居たるが、漸次呼吸困難を増し、兩側頸部腫脹し、「チフテリ」の疑にて血清の注射迄受け當大學小兒科に入院せしものにして、小兒科の診察所見は頰部、頸部、胸腹部に互る廣汎なる皮膚氣腫あり、レントゲン寫眞によりて右側上肺葉に1錢銅貨大の陰影を認め、茲に於て紹介され當耳鼻喉科に來りしものにして、百方治療を加へしも效無く呼吸困難にて死亡せし症例なり。本例は剖檢を缺くにより斷言を憚るも、食道異物が苦痛無き儘に放置され居り、其の異物が永き期間に周圍組織に移行し炎症を起し、遂に縦隔竇より肺に達し、之より皮膚氣腫を惹起せしものならんと推定さる。本例は貨幣?なりし爲レントゲン寫眞に陰影を生じたるも、陰影を生ぜざる魚骨等の異物たりし際は原因不明のものとして葬り去らるる事あるべく、此點専門家は勿論一般醫師の注意を要すと述べたり。

(高原抄)

19. 喉頭結核に對する療法としての喉頭截開術

田中文男

演者は大正元年、病變が會厭部に限局せる 18

歳の男子の喉頭結核に於て會厭切除術を行ひ、其の喉頭の病變は全く根治し兵役の義務まで果し、9年の後再檢せる際にも完全に治癒し居たる1症例を経験し、當時未だ斯かる治験例の我國文獻に見當らざるを以て之を報告し(治療及び處方、第3卷、大正11年)一般の注意を促すと共に演者自身も亦其の後此手術的療法に多少とも力を盡し來り、其の後尙ほ3例の治験例を加へ、適應症を選ばば會厭部結核は手術的療法により可成りの効果を期待し得ると考へるに至れり。之に反し聲門部の結核に於ては從來喉頭内よりの切除術又は搔抓手術が試みられ居るも、之を以てしては完全なる病竈の除去は期待し得ずして爲に見るべき効果を獲られざるの状態なり。然るに演者は昭和8年、7箇月以前よりの聲音嘶啞を主訴とせる、比較的肺所見輕微にして發熱なき44歳の男子を診察し、右聲門部に結核性病變を認め、更に試験的切除により組織的検査を施すも定型的結核性病變なるを確め得たるが、この症例に於て演者は喉頭截開術が最適なりと信じ之を施行し肉眼監視の下に病竈を除去せり。其の後郷里の専門醫により後處置を受けせしめ居たりしが漸次自覺並に他覺的症狀は消退し、最近は何等の苦痛も無きとの事にて、念の爲本年9月患者に來院を乞ひ精査せしに右側聲門部は瘢痕にて治癒し、左側聲門部は正常なるを知れり。手術後滿2年の今日斯かる所見なれば、本例の喉頭結核は全治したりと云ひ得べく、單に1例なれども貴重なる経験なりとし、以上を以て演者は喉頭結核に對しては、其の適應症を選擇せば外科的療法が最も有効にして、之により全治する事も稀に非ず、殊に喉頭内の病變が主として會厭に在る場合は喉頭内手術により會厭切除を行ひ、又若し聲門部に存する際は喉頭截開術により之を切除するが目下に於ける理想的療法なりと述べたり。

(高原抄)

岡山醫學會第370回通常會

同會は本月16日午後4時より岡山醫科大學第1講堂に於て開會す生沼庶務主幹開會を報じ直ちに講演に移る。

1. 抗血小板免疫血清に關する研究

其の1 血漿凝固に及ぼす影響に
就て

岡山醫科大學衛生學教室

清水 光 治 君

實驗の目的

余は曩に葡萄狀球菌の血漿凝固作用と毒力との關係を報告せる一方血小板の移動が血液凝固作用に影響ある點より更に血漿凝固に及ぼす影響を研究せんとす。先づ抗血小板免疫血清を作り其の免疫價を凝集反應を以て檢し次に血小板が及ぼす影響に血漿凝固作用に及ぼす影響をFischerの血漿凝固時間測定管にて研究し興味ある成績を得たるを以て此處に報告せんとす。

實驗方法

正常家兎耳靜脈より採血せし血液より血小板を分離し以て血小板の免疫血清を製し實驗に供せり。

實驗結果

イ) 抗家兎血小板「モルモット」血清を家兎耳靜脈に注射せる場合は注射後血小板數減少し漸次増加せり。

ロ) 健康「モルモット」血清を注射せる場合は注射後血小板數に増加し漸次減少す。

ハ) 家兎血小板を荷鼠に注射する場合は凝集價に於て注射回数1回、2回、3回に及ぶも餘り亢進せずして4回、5回に及びて著しく進行せり。

ニ) 抗血小板血清の家兎血小板に對する凝集反

應の觀察時間は5時間後が最も見易く健康「モルモット」の場合は9時間後が最も良しとするも凝集の程度も低く免疫血清の如く定型的ならず。

ホ) 免疫法としては注射濃度50倍なるものに於ては2日、7日目間隔を以て5回反覆せるをよしと認む。

ヘ) 抗血小板血清の類屬凝集反應は血小板に對する凝集價640倍のものに於て赤血球に於ては16倍の凝集價を示し白血球に於ては其の程度低し。

2. 強感作に依る被働性過敏症に就て

(感作力の發現竝に消失時期)

岡山醫科大學衛生學教室

湊 次 郎 君

被働性過敏症に於ける過敏性抗體の消長と過敏症發症との關係に就ての從來の業績は多くは、發症發現の時期即ち潜伏期の短縮に重きを置きたるか、或は又發現時期を深く顧慮する事なくして消失の時期を探求したるが如し。Weil, Coca u. Kosakai 等が同種被働性過敏症に於ては60—70日、異種被働性過敏症に於ては6日迄過敏症の持續を見たりと云へるも、之等の報告は感作に使用したる沈降素の量的關係明瞭ならず、又抗原再注射量に關しても不鮮明なる點なしとせず。

余は荷鼠の被働性過敏症に於て感作に使用したる沈降素量を500—4000單位に變化して、各沈降素量に就て感作力の發現(即ち過敏症惹起)時期並に消失に到る時期を研究したり。

而して抗原再注射に當りては各免疫血清の結合帶を標準として之を行ひ、過敏症狀の判別には動物の生死を以て之を定めたり。

其の成績に依れば大量の沈降素量を以て海猿を感作したる時は少量を以て感作したる時よりも過敏症發現の時期短縮せられ、且其の消失の時期も延長す。

即ち 500 單位の沈降素量を以て感作したる時は 17 時間にて發現し 48 時間迄持續し 72 時間にては消失するに對し、1000 單位にては 4 時間にて發現し 4 日迄持續し 5 日にて消失 2000 單位にては 1 時間にて發現し 7 日迄持續し 8 日にて消失、4000 單位にては 5 分にて發現し 8 日迄持續し 9 日にて消失するを知りたり。

3. 新産兒の「レントゲン」學的研究

岡山醫科大學産科婦人科教室

山 本 英 雄 君

母體內生活を脱して一個獨立せる生活を營爲し始めたる新産兒は其の身體の構成並に諸臟器の機能に於ても一般乳兒或は成人と自ら顯著なる差違

を有するものなれば、新産兒疾患は新産兒期に固有なるもの多數に存し、猶ほ同一疾患にありても其の症状、轉歸等を相異にする事稀ならず。

然るに新産兒疾病即ち新産兒病理學とも云ふ可きものと從來比較的閑却視せられ、其の研究業績の如き寔に少し、依て私は之が缺を補ひ、一般新産兒の胸部「レントゲン」像の如何なるものなりやを窺知すると共に成人或は乳幼兒との異同を闡明にし、將來疾病の豫防乃至は治療に關する知見を増し以て國民保健上に貢獻す可きは實に吾々産科醫の當然の職責なりと考へ之が研究に着手したるなり。

其の成績は既に各學會に於て報告し又原著として岡山醫學會雜誌 第 48 年 1 號、2 號、4 號、5 號に掲載したれば茲に記述する事を省略せり。

右終りて午後 5 時 30 分閉會す、當日の來會者は 35 名なり。

◎ 岡 山 醫 會 學 通 常 會

岡山醫學會第 371 回通常會は本年 5 月 21 日午後 4 時より

岡山醫科大學に於て閉會す